

留学生は帰国後何をしているのか？

★ プロ野球大リーグで活躍する選手と留学生の共通性

先日、プロ野球でソフトバンク vs 日本ハムの試合が話題になった。6 年ぶりに、アメリカ大リーグより川崎宗則選手が帰国し、日本でプレイを披露したのである。「大リーグ帰り」と言えば、パワフルなプレイを想像する。もちろん川崎選手がそのような選手ではないことはよくわかっているが、何か日本でプレイしていた時とは異なることを期待するものだ。実際にこの試合では、守備でジャンピングキャッチをして球場を沸かせている。

川崎選手に限らず、大リーグで活躍し日本に戻ってきた選手は何が違うのであろうか。もちろん、私は野球の専門家ではないので、ファンの視点でしか語ることはできないのであるが、大きく違うと感じるのは、やはり「気迫」とか「勢い」というものではないだろうか。大変申し訳ない言い方ではあるが、大リーグで活躍し、その後日本に戻ってくるということは、選手の体力としては全盛期を過ぎていることが少なくない。もちろん技術は上がっているかもしれないが、しかし、選手全体としての総合力としては、大リーグにいる時よりも劣っているのかもしれない。しかし、野球に対する情熱や、一つのプレイに対する気迫など、野球に対する意識というものはかなり違うような気がする。

これは、一つには、日本の野球界という確立された世界の中から飛び出し、自分一人で外国で挑戦した人に共通する意識があるのではないだろうか。もちろん、野球が好きという感情はあると思うが、全く自分のことが知られていない新しい環境で、自分一人の実力で勝負するということは、それまでの意識を変える必要があるのではないか。今までの慣れた環境とは異なり、自分の地位や居場所が確立された社会ではないところで自分を見つめ直した人は、それが良いかどうかとか、それを行った結果が良くなったかどうかは別にして、それまでとは異なる意識になるということではないだろうか。

さて、「留学生通信」でいきなり野球の話をしたので、違和感のあった人も少なくないかもしれない。しかし、「自分が今までいた慣れた場所から離れて、知らない世界で一人実力を出して頑張る」ということは、日本に来ている留学生においても同じではないだろうか。留学生も同じ気持ちで日本で頑張っているし、また、日本から母国に帰国して頑張っている人もいる。

プロ野球の世界では、大リーグで活躍する人もいれば、夢破れて日本に戻ってくる人もいる。そのまま現地に住む人もいれば、日本に戻ってから活躍する選手も少なくない。場合によっては、母国に帰って、選手ではなく監督として活躍するような選手もいるのである。それは、日本に来ている助っ人外国人選手にもあてはまるだろう。

「プロ野球」と「留学生」といえば、まったく異なるものかもしれないし、その知名度や注目度ということでは全く異なる存在である。しかし、こうした意味では、本人の意識としては全く同じではないのだろうか。

★ インドネシアの新聞における日本への留学生の評価

インドネシアの新聞で、日本への留学ということに関して特集が組まれた。なお、ここで言う「日本への留学生」は、日本語学校だけではなく、大学や大学院なども含むものであるとされている。

日本への留学生の特徴としては、基本的に私費留学生が非常に多く、そのために、「中所得以上の家庭出身者が多く、もともと高い教育レベルにある人が日本に留学している」ということが見受けられると解説している。インドネシアの報道においては「国費留学を増やすべき」ということが一つの切り口になっており、それは、貧困層でも優秀な人材はいるのであるから、経済的なこととは関係なく、広く優秀な人材を海外に留学させるべきであるということをも主張している。このことに関しては異存はないが、一方で、母国で教育レベルが低い人が日本に留学しても、モラルなどの部分で問題があったり、あるいは授業についていけないなどの懸念がある。機会という意味では新聞の主張は正しいのであるが、インドネシアの中でできていないことを海外への留学に当てはめるのは無理があるのかもしれない。

さて、新聞の特集によると「本来留学の希望先はアメリカが一位」であるのかかわらず「日本への留学は帰国後非常に役に立った」という人が少なくない。特に、母国インドネシアに戻ってから、日本から留学して戻った人が、他の国へ留学して戻った人に比べて非常に少ないため、インドネシア国内における影響力は非常に限定的であるという印象があるにもかかわらず、その影響力がかなり重要な場面で発揮されることが多く、日本での留学が、アメリカや中国へ留学するよりも良い影響を与えていることを示唆しているのである。

新聞では、これらの内容に関して「日本の自由な雰囲気と集団的な道徳観が、インドネシアに戻ってから、他の国で留学してきた人々の輪を壊さずに影響力を行使することができる能力を身に着けさせた」というような見解を述べている。実際に、日本の中では「空気を読む」とか「TPOをわきまえる」ということがよく言われている。我々は何も言われなくても、「乾杯までは箸をつけない」といった暗黙の了解があり、それを守ることが当然という感じになっているが、そのような集団生活での暗黙の了解こそが、母

国に戻ってから、集団の中で重要なポジションを得られる力になっているのかもしれない。

そのように考えた場合、単純に日本語を学ぶだけではなく「日本の文化や習慣を学ぶこと」が実は最も重要なことであることが、インドネシアの新聞でも指摘されているのであり、同時に、そのような教育があったからこそ、日本は高度経済成長を遂げ、なおかつ、現在留学生の母国からその部分を学びたいというように思われているのではないだろうか。

★ 「日本への留学」ということに対する海外の批評

さて、日本への留学生が母国インドネシアに帰国してからどのようなことをしているか、どのように活躍しているかが気になるところだ。新聞によれば、日本への留学経験者として集まった人々の中には、大学教授、大学の学長、医師、研究者、大臣、長官、政治家、官僚、銀行役員、医師、社会起業家、キャスター、アナウンサー、女優、日本企業の従業員あるいは役員クラスなどが挙げられている。いずれも固有名詞は書かれていないものの、さまざまな分野で活躍していることがわかる。

それでも、欧米の大学と比べると現在でも現役の外国人留学生が日本企業に就職できる数が少ないこと、日本の大学は質と経営を向上させる努力が足りないことを指摘する声が目立った。留学を考えている者は、米国>英国>日本という順番に留学先を選ぶ傾向があった。米国や英国で学位をとれば将来のキャリアに有利になることを念頭に選んでおり、そうした国では実際に多く留学を受け入れている背景がある。

一方、日本に留学する目的は学位を取得するというよりは「地理的な近さ」「技術力」「文化的な近さや親和性」で選んでいた。また、職種によって日本への印象が異なり、大学教授や研究職に就いている人は、日本留学は米国や英国留学と比べ評価が劣ることはなく、むしろ日本への留学の方が優先して考えられていることがわかる。一方ビジネスや政治などに関して言えば、やはり米国・英国に対する希望が多く、その方が母国に帰国した後も大きく役に立っているというような意見が少なくない。日本における外交関係や、あるいは経済貿易関係をそのまま反映したような内容になっている。が、やはり技術力や研究という意味では日本は世界の中でも抜きん出ており、日本に残って研究するばかりではなく母国に戻って研究を続け、日本にある母校と連携するというようなことも十分にできることから、研究職や教育関連の業務に関しては非常に評価が高い。これに対して、日本の企業や貿易に関しては、やはり海外に押され気味なところがあり、なおかつ政府などに頼って「親方日の丸」というようなことが生まれてしまうなど、さまざまな面で経済活動が起業独立で活躍できる場面が少なく、日本経済の海外における弱点が、留学生の目から見ても明らかになってしまっているのではないかと感じられるのである。

留学生は、母国に帰ってから活躍するものの、やはり日本に留学すると日本の企業や環境の影響を強く受けてしまうということがある、そのことから、「日本への留学」の印象が決まってくる。優秀な留学生を得るためには、卒業生に活躍してもらわなければならないし、これから留学を希望している学生の「憧れ」になってもらわなければならないのではないか。

ある意味当たり前であるが、なぜか日本ができていない部分がここなのではないかという気がしてならない。

★ 指摘される「元日本留学生のネットワーク」の構築

日本へ留学して良かったということは、少なからず挙げられる。しかし、日本への留学のデメリットということもインドネシアの新聞には掲載されている。「日本語の習得が難しい」とか「暗黙の了解がよくわからない」などというような、現在の日本人ではどうしようもない部分の指摘もあるし、また、「日本に留学しても日本企業で就職することは難しい」などの問題もある。

しかし、ここでぜひ注目していただきたい指摘が「日本への元留学生をつなぐものや、日本留学した人の交流会のようなものが少ない」ということである。要するに、「日本へ留学した人々のネットワークの構築ができていない」ということが指摘されているのである。

調べてみれば、全ての卒業生を網羅できていないが、日本政府機関、大学、企業にある程度のネットワークが存在することはする。しかし、帰国した元日本留学生と定期的にコンタクトを取れる人材が不足していることは間違いない。政府関連機関の海外事務所の数はそれなりにあり、大学の海外事務所も留学促進のため近年増えてきており、数だけでいうと卒業生を把握できないことはない。現在でそのような状態なのであるから、「留学生 30 万人計画」を遂行すれば当然に、ネットワークが不完全なものになってしまうことが予想される。

日本の場合、掛け声が上がっている時は最優先で物事を進めるのであるが、その熱が冷めてしまうと一気に事業が進まなくなり予算が削減されるという欠点がある。しかし、日本に留学した生徒は「日本に留学したというキャリアや過去」を捨てることはできないのだから、そのことを誇りに思ってもらうように努力をしなければならない。しかし、そのようなフォローが日本は不完全であるという。

海外の場合各大学に、卒業生の名前と顔を完全に覚え、帰国先を訪れた場合は必ず会い、ざっくばらんに何でも話せる人間関係を構築してきた教職員がいる。その教員を通して海外のネットワークができ、そのことが米国や英国の、そしてその大学や語学学校の評判を高めているのである。また各国は、その教員に対して活動を援助し、その教員のネットワークを得ることによって「卒業した留学生のネットワーク」を活用できるよ

うになっているのである。しかし日本は、残念ながらそのような教員を持つところも少なく、またそのような教員がいたとしても、政府がそのネットワーク構築に協力するようなことは少ないのが現実だ。特に大使館などでそのようなことに興味がある人がいても、数年で人事異動になってしまうことを考えれば、継続的に日本留学の卒業生をフォローする体制が確立しているとはとても言いがたいのである。

本来、このようなことはとても重要である。日本語学校においても、卒業生が卒業後どのようなになっているのかを知り、そしてその母国においてネットワークを作り、新たな日本への留学生の開拓の一翼を担ってくれるようにすることが理想ではないのだろうか。

実際に、政治的な干渉が少なく、技術力の高い日本に対する期待は非常に大きい。そのような日本と母国の懸け橋になりたいと日本への留学を希望する人は少なくない。そうした人財を受け入れるためには、まず卒業生が「いま、どこで、何をしているのか」を把握すること、そして、元日本留学生との信頼関係をより強くし、彼らの母国の発展に貢献していくことが必要である。そのようにして継続した人間関係を築くことこそ、「縁」を大事にしてきた日本の本来の文化ではないのか。